

日々の子どもの姿を追って

兎 東 淑 美

はじめに

附属幼稚園で園児と過ごすようになって以来、子ども達の姿は以前と変りなく、園庭で走ったり、遊具で思いきり遊んだり、裏山に遊びに行ったり、虫や草花を採ったり、ターザンブランコで遊んだり、体を思い切り使って遊んでいる。子ども達の成長課程には、目を見張る驚きがある。未熟な中にも微笑ましい姿、心の温まる姿や言葉がある。手のひらに豆（子ども達は頑張り豆という）を作って、渡り棒・登り棒・鉄棒に挑戦する。前向きで積極的な生き生きした行動力、そんな中から保育に携わる者は元気をもらう毎日である。

附属幼稚園は平成19年度創立三十周年を迎えた。園として大きな式典はしなかったが、年間の行事や保育内容を充実させ、心に残る一年としたと考えた。

そこで本年の取り組みと、それに関わる子ども達と保育者の姿を追って、子どもの成長を考えてみたいと思った。

平成20年3月、幼稚園教育要領は平成になって3回目の改訂が行われた。改訂の内容について新聞等の報道によると、次のようなことが伝えられている。

- 幼小の連携の推進（幼小の交流、教員の相互理解）
- 幼稚園と家庭の連携
- 預かり保育と子育ての支援を規定
- 幼稚園が義務教育及びその後の教育の基礎を培うことを明確化している。

又健康面においても現在は平成元年の改訂時より、子どもの姿が悪くなっている。「歩き方」「子どもの体の状態がおかしい」「子どもの姿が変わって来ている」「子どもが危ない」運動量の減少による運動能力の低下と体

力の低下・意欲の低下等があると言われている。

この様な子どもの体の現状を聞くと、本園の子ども達が、いかに恵まれた環境にあるか理解出来る。

そのことも踏まえて本園の教育の取り組みや保育の内容について改めて子どもの姿を追って考えてみたいと思う。

第Ⅰ章

附属幼稚園の活動と子ども達の姿

Ⅰ-1 「裏山とトトロのお話」

年少すみれ組の秋の参観日、2クラスがそれぞれ別の活動をしていた。1クラスが裏山での活動の参観であった。どんなことをしているのか、私もお家の方と一緒に裏山に登った。

丁度、子ども達は、トトロのお話に夢中になっていた。裏山にはトトロが住んでいると思い込んでいる。子ども達が裏山に行った時は——トトロが出掛けている——と全員の子どもが思っている。

担任が「トトロさんお邪魔します」と挨拶をすると、全員が「トトロさんおじゃまします」と言って山の頂上の平らな場所でお家に入る様子をする。園児のお家の方も、その様子を見ている。それから担任と子ども達が、山の木や枝を見て、トトロの使った物と思うものの話が次々と出て来た。その場所は正に「トトロの住んでいる場所」子ども達の会話が終ると、担任は「トトロさんお邪魔しました」と言った。子ども達も同じように言って、次は粘土のある場所へ移動した。担任は普段の山での、子ども達の遊ぶ様子を現場を見乍ら、お家の方に説明していた。子ども達は、嬉しそうにお家の方に話し、聞いているお家の方の平和で幸せな温かい情景が心に残った。

後日、担任に当日迄の子どもの姿について話を聞いた。

※年少すみれ組で「トトロの世界が始まった訳について」

担任は、入園後半年が経った子ども達について、担任やお友達と一緒に、色々な遊びや活動を楽しむ中で、一人ひとりが興味関心を深めながら、思い切り楽しんで欲しいと願っていた。

10月の或る朝の活動の折、担任は「お山の原っぱに、どんぐりがたくさん落ちていたよ」と話すと、

Hさんが「どんぐりの落ちている所には、トトロが住んでいるんだよ。」

T君「トトロー！！ さがしにいきたい」

担任「トトロどこにいるかなー」

Hさん「きっとお山にいるよ」

Hさんの生き生きとした表情に、クラス全員がトトロ探しへの期待の気持ちを膨らませたという。

担任はHさんに対して日々の様子から、次のような願いを持っていた。クラスで一番早い生れで、お母さんからも頼りにされしっかりしている。しかし「いい子でなければならない」「何でも出来なければならない」と言う気持の強い面を持っていた。

もっと年少児らしく、自由に伸々と、夢中になったり失敗したりする経験もして欲しいと思っていた時、前述の様なクラスの展開となった。担任はHさんが大好きなトトロの世界を空想しながら、自分の思いに自信を持って話したり、友達の思いに共感して、一緒に遊ぶ楽しさを伸々と味わって欲しいと願った。「どんぐりが落ちている所には、トトロが住んでいるんだよ。」の一言で、クラスの子も達は「トトロ探しをしよう」と約束をして、とてもいい表情で山に行くのを楽しみにしていた。山に入ると、早速道を駆け回り「トトロー！！」とそれぞれの子もが叫んで、心の中は空想の世界がいばいに広がっていった。

裏山の自然は子ども達の夢を温かく、大きく包み込む素晴らしい環境

空想の中でのごっこ遊びは広がり、山道で見つけた小さな穴は「まっくろくろすけのお家」そこに吹く風は「ネコバス」になる。どんどん膨らむ空想は、普段から遊んでいる裏山の一角を「トトロのお家」に見立ててし

まった。子ども達が夢中に遊び込んでいる時の一日に、私は子ども達とお家の方と一緒に「トトロのお家」に、お邪魔したことになるのだった。

…幼稚園見学の親子組の案内をした後裏山へ移動した。その時、年中ばら組の子ども達が山から降りて来た。一ヶ所に集って担任とお話をしていた。

このクラスは去年の年少すみれ組が進級したクラスだった。裏山に登る前に子ども達が空箱を使って、首からバックの様な物を下げていたので、どんなお話をしているか興味を持って、その様子を見ていた。

「山の木は枝がふくらんでいた所があった」「穴もあった」「うさぎの目が光った」「木のふくらんだ所に、前は白い毛がついていたけど、今日はなくなっていた。」「穴はうさぎの隠れ家」等と担任に伝えていた。

体格もすみれ組より大きくなり、園生活も楽しそう。自分の居場所がクラスの中にあると感じた。皆が首にかけたバックだったが、中の数人の男の子は、薄い正方形の箱（蛍光灯の空箱）を開くようにしてある。蓋をあけると、中はパソコンのように四角の升目がマジックで書かれていた。とても上手に出来ていた。現代の子どものらしい立派なパソコンであった。その他、宝の地図・うさぎを入れるケース・マイク・双眼鏡と探検バックも上手に出来ていた。

年少組の時「トトロのお家にお邪魔した」あの情景とは話題も持物も観察力も違っていて、子ども達の大きな成長を感じた。今では「トトロの世界」は終り、次の新しい世界に入って新しい不思議を感じている。3才児のまるごとどっぷり入って何の不思議も、恐ろしさもないそのものになりきる空想の年齢。それから1年間の豊かな生活経験や沢山のお話の経験からも、観察力が育ち会話の中に恐ろしさや弱い人を守る男らしさなど、人間関係や規範性も育って来ていた。大きな自然の中で、年齢ごとの沢山の不思議を体験していた。裏山を使ったこの活動は五領域の全てを使った活動であり、感性を育てる活動である。担任がHさんに抱いていた気持は

活動を通して伸ばされていた。そこには生き生きとした子どもの世界が展開されていた。



トトロのお家だ

I-2 「みんなで創ろう！魔女さんと一緒に遊びたい」

年長まつ1組は“裏山”という恵まれた環境を保育の中に取り入れるという活動を担任が考え、年間を通して、子ども達の興味をもっている自然とは何かを考えながら保育を進めた。

〈活動の流れ〉

- 4月 ・桜の木を飾ろう→桜の花びらをひろい、自分で画用紙に描いた桜の木に貼りつけていく。
- 5月 ・和紙に葉の模様をつける。
・クローバー染め→煮出したクローバーの汁で和紙を染める。
(母の日のプレゼント)
- 6月 ・きれいな石を拾う。ビンのまわりにつけた紙粘土にうめて模様にする(父の日のプレゼント)
- 7月 ・しそで色水遊び→手でもんで色水を作って遊ぶ。
・しそ染め→紙に豆乳で絵を描き乾かし、それを「しそ」を絞って作った液につけて染める。
- 8月 ・宝さがし→裏山に隠した宝物を見つけて遊ぶ。

- 10月
 - ・運動会用バンダナを染める→輪ゴムでしばったり、石やボタンを入れてしばって、しばり染めをする。（染料使用）
 - ・お部屋を飾ろう→ビニール紐に裏山でみつけたいいものをつけていく（どんぐり・枝・葉っぱ・まつぼっくり・きれいな石・木の実）
 - ・帽子を飾ろう→裏山にあるものを好きにつけていく
 - ・丸子公園遠足→どんぐり染めをする為、どんぐりを拾ってくる。
 - ・ようしゅやまごぼう探し
- 11月
 - ・どんぐり染め→裏山の木を集めて使う。
 - ・やき芋大会→裏山の木で焼く
- 12月
 - ・まつぼっくりリースづくり→紙皿にボンドでまつぼっくりをつけて、わた・ビーズ・ひいら木で飾る。
- 1月
 - ・おもちつき大会→裏山の木や松葉を集めて行く。
- 2月
 - ・劇の衣裳を染める→しばり染め+豆乳で絵を描く。（染料を使用）

まつ組は、年中組の劇の発表会（平成19年2月）やまんば劇場で「おばけやしきへようこそ」を演じて魔女・おばけ・子ども役になった劇あそびが基になり、年間を通した担任の綿密なクラス活動の計画の中で夢が育っている。〈7月海賊ごっこ〉バンダナをまいて変身〈運動会・出かけよう海島へ〉リズム・看板作り・親子競技で裏山へ宝探し〈11月〉宝探しごっこ→誰かからの手紙→幼稚園は昔は海だったというお話→絵を描こう裏山はどんな海だったんだろう？→裏山の探検・魔女がいるかもしれない！

ほぼ1年近い連続している計画の中で活動を進めているが『学級経営の願い』では「こんなふうになりたい」と友達と思いを伝え合いながら、皆で一つのことに向って遊ぶ楽しさを味わう。

学級での子ども達の様子は、トラブルもなく穏やかなクラス・とび抜け

てクラスをリードしていくタイプの子が不在。真面目で周囲の子に合わせて満足している。発達がゆっくりの子が多い為、担任は全体的に活発な活動を望み考えている。

いろいろな遊びや経験を通して、自分に自信をつけたり、友だちの頑張る姿に刺激されたり、認めたり、励まし合いながら互いに育ちかわりを深めていく。

活動をして行く中で目立つ子ばかりにスポットを当てるのではなく、思いを持っているけれど、うまく伝えられない子に注目し、意識的に発言をひろったりその姿をクラス全体に伝えたいと願った。

5ヶ月後には卒園を迎え、小学生になる子ども達、この時期の子ども達の成長は、毎日ぐんぐん伸びる、目を見張る成長の時でもある。

まつ組の夢と空想は、生活経験の豊富さや、字が読める、知識が多いことで年少・年中と違っている。そんなことから宝探しを始めて、数日後、誰かからのナゾの手紙が来る。ボロボロの手紙、差出人のわからない手紙から、この遊びは発展して行く。手紙の中に「昔、幼稚園は海じゃった」の内容の文があり、子ども達は、それぞれで絵を描き夢を膨らませ、手紙の所在を、園の先生方に聞いて回り、次は裏山へ探しに行く。そこで山にある色々のものが、だんだんと魔女に関係あるものに見えて来る。いよいよ魔女探しが始まる。魔女を見つけたらどうしたい?…から(手紙を出したい)(幼稚園に遊びに来て欲しい)(お部屋をきれいにしたい)(お腹がすいているから果物をいっぱいになりたい)(お部屋は暗い方がいい)等の意見から魔女に手紙を書き、お部屋に迎えることになり、作戦会議もする。迎えるお部屋の用意をした。そして子ども達は魔女が好きだと思ふもの、必要と思ふものを作った。しかし魔女が来そうだと思う時は来なかった。お誕生会が終って部屋に戻ると、お部屋はメチャクチャ。お部屋の中央のテーブルに包が一つ。開けてみるとキャンディーのような包が沢山出て来た。それは魔女からの御礼の品、「キラキラどんぐり」だった。



魔女あそび



魔女あそび 2

長く続いた魔女への夢は園中を巻き込んで大きく膨らんだ大ロマンであった。こども達の姿を見乍ら、先生方も楽しい夢を見させてもらった。綿密な計画の上で自然の素材を使って作品を作ってゆく場面、染物。正に生きる力になる活動。年長の経験を生かし、知っている裏山の中で存分に体や心、全ての五感を使い、5領域を充分に使ったダイナミックな夢は、子ども達の心に一生涯残るだろうと思っている。担任は願いの中で目立つ子ばかりではなく自分の思いをうまく伝えられない子にも配慮して声をかけ自信を持たせている。前向きな姿や感性がキラキラ輝く素晴らしい活動だった。この活動は附属幼稚園創立三十周年の記念研究、「里山を使った園の活動」として県に申請した結果、一昨年に引き続き、文科省の教育改革推進モデル事業として認定され、補助金を頂く事が出来た。

I-3 「元気玉とどけ」

5月「なかよし運動会」が行われた。毎年この時期に行う行事の一つである。入園式から始まった新入園児の生活が、少し落ち着き軌道に乗って、それぞれの組の中で自分の居場所が出来て、年長組・年中組の中にも溶け込んで来た時期。友達と一緒に元気に身体を動かして、楽しく運動会をする。

○クラスや学年、他の学年の友達の競技を見たり、応援したりして仲間意識を持つ。

このようなねらいの基に行われる運動会で、子ども達と先生で行う。こ

の数日前に参観日があり、お家の方には運動会の一部分、全員の体操と行進を行い、子ども達の成長を見て頂いている。なかよし運動会は全員の体操・年少すみれ組の行進・ゲーム・かけっこ、最後に学年別競技「力をあわせて」があった。

年中組では赤白組に別れた玉入、赤白の「かご」を背負った動く実習生のかごの中に玉を入れて、数の多い方が勝である。2回戦とも赤が勝った。ゲームが終り子ども達は、落ちた玉を合図で片付けた。

その時、司会の先生が突然「お片付けは白組の勝ち」と放送を入れた。ションボリしていた白組の子ども達は喜んだ。とっさの状況判断で子ども達の良い所を認めてあげることは、保育者にとってとても大切である。保育者の言葉が子どもの活気や心を動かしていた。保育者は常にスキルアップが大切。

さて、年長組のプログラムの「元気玉とどけ」のゲームに入った。私を含め4人の先生が大変疲れて倒れながら、やっと椅子に辿り着くと、子ども達がピカピカの元気玉を2人で運び合い、一番最後のグループが先生に元気玉を渡す。早くもらった先生が元気パワーをもらって台に登り元気になると言うゲーム。子ども達は、疲れ果てた先生方の姿にビックリしてしまっていたが、ゲームは楽しく無事終った。運動会終了後、子ども達はそれぞれの先生の所へ行き「先生大丈夫？」と心配して声をかけてくれた。心から心配してくれる姿に嬉しくなった。この時代の子ども達の世界を大切にしたいと思った。

その日の夕方、職員室でまつ組担任や、他のクラスの先生方が話している声が聞こえて来た。運動会が終ってA君が先生に「先生元気玉どこにある？」と聞いたので「さっきの玉はピアノの下にあるよ」と答えると「先生僕は知っているよ、元気玉はね、みんなの心の中にあるんだよ」と話したと言う。

A君の素敵な話に、職員は心が洗われる思いになった。

翌日、副園長が登園して来たA君に元気玉の事を聞くと同じ答えが返っ

てきた。更に「元気玉って、どんな大きさ？」と尋ねると「それは皆同じ大きさなんだよ」と答えたという。昼食後、ブロックで遊んでいた A 君を見つけて私も聞いてみたら同じように自然に話してくれた。

5 才児の世界・夢や憧れ・この素直な素敵な世界が、教職員の皆を幸せにさせてくれた。保育の原点を子どもより学ばせてもらった。正に「元気玉」をもらった思いになった。

運動会の競技から始まった事であったが、これは人間関係・言葉・表現・健康にも関係している。単なる言葉ではなく、多くの人に感動を与えている。

このような言葉を保育者は、見逃さない、聞き逃さないことが大切。この場合の保育者の聞き逃さない心と他の保育者に伝え、共に成長出来たことは良かった。

毎日の保育の中に素敵な種が蒔かれ、芽が出ていることを感じた例であった。



元気玉 2



元気玉 3

I-4 「我慢することもあるよね」

年中組の子どもが沢山乗る通園バスの停留所での或る日のこと。そこでは6名の子どもが乗り降りしているが、帰りのバスから降りた時のこと、1人の子どもが4人のお友達に、おばあちゃんの手作りの飾りをあげた。

もらえなかった子どもがいた。お迎えに出ていて飾り物をもらった子どものお母さんから、担任にお便りが来た。「物のやり取りについて、もらえなかった子どもが可哀相だから、そのようなことは、しないようにしてほしい」旨の内容だった。

クラス担任は、年中組のクラスの子ども達に、その様子を話して意見を聞いてみた。

「おばあちゃんに足りない分を作ってもらおう」等、子ども達の中から沢山の意見が出たが、或る1人の子が静かに言った。

「我慢することもあるよねー」…………

先生は、そこをまとめて結論を出さず、子ども達に話の余韻を残し乍ら終わったという。

「考えること」の大切さ、そして4才の子どもの中に、このような考えの出来る子がいる事に驚き感動した。保育者にも大きなインパクトを与えた事件であった。現在の子どもは、少子化で兄弟姉妹も少ないどちらかというと、自分中心で我慢が出来ない子どもが多いと思う中でのこと。この子どもの姿から、幼児期の幼稚園教育の大切さの一つである、子どもの成長と人間関係の我慢・思いやりを見ることが出来た例である。

後日、その事を参観日で話した。お家の方の中に、ハッと驚く表情が伝わった。

I -5 「或るお母さんの2つの話」

丁度3人の子どもを成人させた保育者の子育て時代のこと。

その時家族は御主人と子ども3人（7才、5才、2才）と姑との6人暮らし。その当時御主人は会社が忙しく育児には非協力だった。保育者は仕事と子ども3人の世話と姑の問題もあって、幼稚園教諭の仕事を辞めようかと思った。そこで3人の子どもを並ばせて、お母さんは涙を流し子どもと真剣に向かい合って、つらい事を話した。その時長女の反応は、「私は家に帰るとお祖母ちゃんがいるし、御飯も作ってもらえる。お母さんがいな

いのは淋しいけれど我慢出来るよ。お仕事辞めないで続けていいよ」と言った。

5才の次女は「お母さん頑張って生きていれば、いつかいいことがあるよ。」と言った。その時の、5才の次女の言葉にびっくりしたり、感動したという。

その後、小学生になった次女は母の日に作文を書いた。それが入選して大きなホールで発表することになった。担任の先生の勧めで発表を聞きに行った。題名は「お母さんの仕事」であった。お母さんはその発表を聞いて涙が止まらなかったという。

或る看護士のお母さんが同じように仕事と家庭の間で悩み、5才の子どもに仕事を辞めようか真剣に話した。その子は「お母さんのお仕事は神様に一番近いお仕事だよ。辞めない方がいいよ。辞めないで」と話したという。このお母さんも涙が止まらなかったと話された。

前述の保育者は「子どもと真剣に向き合い、叱る時は叱る。誉める時はしっかり誉める。沢山抱きしめて育てた。」と話された。

育児も教育も、真剣に子どもと向き合うことの大切さを感じる。単に小さいからと向き合わないのではなく、真剣に向き合って話せば、小さくてもその場の雰囲気や事情を理解して行くもの。子どもと思えぬ、どこで覚えたのだらうと思うような大人の使う言葉を話すのに驚くが、5才であっても心は必ず伝わる清らかな心であった。

私事になるが、私は旧満洲の新京で生れた。3才の頃、戦況は悪化し住んでいた官舎の人々に、最悪の時は自決するように薬が配られたそうであった。しかし官舎の人々は「皆で生きよう、逃げられる所まで行こう」と夜道を歩いた。母は妹を背負い、父は食糧や毛布を持った。私は両親に手を引かれ歩いた。歩き乍ら側溝のような所へ落ちた、その時周囲は暗かったことだけ覚えている。

終戦後、平和な時代を迎え、今は亡き父母が満洲の話をする時、「3才だったのに、声も出さず皆と黙々と長い距離を歩いた」と話してくれた。

私は3才であっても、その場の状況を察知したと思う。これは動物の持つ本能的なものかもしれないが本当に大変な時は3才であれば分ると、自分の経験から確信している。

I-6 「砂場のどろんこ遊び」

年長まつ組の男の子3人がタライに水を入れて砂場に運んで行った。

その後、砂場から大きな声、K君「僕の大切なズボンにS君が砂をかけた…大切なズボンなんだ、大切なズボンなんだ。」と、くり返して大泣きをしていた。近く迄行きS君に聞くと、小さな声で「だって僕の所たたいたんだもの」と私にやっと聞こえる声で答えて下を向いていた。K君の余りの大声に大勢の子ども達が集っている中に入る。砂を払ってやり乍ら「大切な物をよごされると悲しいよね。」と言って砂を払い、私は左右の手でK君とS君の小さな手を暫く繋いでいると、K君は少し落着いて来た。そこで静かに「どうしてK君たたいたの？」と聞くと「たたいてなんかいないよ。少しだよ。」S君「たたいたよ。」小さな声だが納得のいかない顔……まだ3人で手を繋いでいると、一方ではK君が悲しそうに泣いていた。「ごめんね」と機械的にあやませたくない。私はこうして手を繋いでいると2人の気持ちがそれぞれ伝わって来て、何か悲しい気持ちになった。小さな声で自然に私は「ごめんね」と出てしまった。するとS君も小さな声で後から「ごめんね」と言った。謝る様に言った訳ではないが、3人の気持ちが繋がった不思議な思いがした。S君は素直だった。そこへ担任が来られ2人の話を聴き解散。

その直後から砂場の穴に入れた水の中に入り、ズボンも上着も泥んこになって遊ぶ4人、その中にS君もいた。周囲の沢山のお友だちのことは全く気にしないで、自分達だけでいい気持ちになってやっている。周囲には勢いよく泥水が飛んでいた。…「洋服が汚れてもいい人と、汚れたくない人もいるから、周りの人に話してから入ろうね…」と話すと、汚れたくない子どもは、その場から離れた。思う存分泥んこ遊びをしたい子が残って、遊びが続いていた。どんどん盛り上がり砂場の中央では、泥まみれの

子どもが「でんぐり返し」を始めて、楽しそうに他の子も真似をしていた。しかし1人が勢い余って、砂場の周囲のコンクリートの部分近くで「でんぐり返し」を始めた。頭を打ったら危険だと思い、その近く迄行った所、突然私は泥水の洗礼を浴びてしまった。

一瞬、その場は静寂となった。泥のとんだ私の姿を見て、皆すまなそうに静かに「ごめんね」と言った。心のこもったお詫びだった。「困ったなー園長先生はこれからお出掛けするの…でも、いいよ、これからきれいにするからね。それからこのコンクリートで頭を打ったら危ないから離れて遊んでね」と伝えてその場を離れた。

廊下を静かに歩き絵本の部屋に向うクラスは、先程砂場で泥んこになって遊んでいた年長まつ組の子ども達のクラスだった。体を綺麗さっぱり洗ってもらい、清潔な服装に着替えていた。さっきあんなに泣いたK君が、すっきりした顔で、先生のお手伝いをしてクラスの絵本を7冊も持っていた。担任に「K君いいお顔していますね」と声をかけると「時々、あのような大声で騒ぐ時があるですが、ストレス解消みたいで、その後、すっきり良い子になるのです。」と話してくれた。「あーそうか、そんな気分の時もあるなー」と私も納得して別れた。

その後、職員室で仕事をしていると「園長先生」と窓から静かに、まつ組のY君が声をかけてくれた。「何か用事、どうした?」と言って職員室を出ると、「園長先生洋服大丈夫?」「ありがとう雑布でふいたから、こんなにきれいになったよ。」「あれ?先生まだついてるよ。」「本当だ、ありがとう。もう一度きれいにするね。」「園長先生気をつけてね」と言ってクラスに戻って行く姿を見て、なんて優しく、いい子だろうと心が温かくなった。



園児達が帰った後の園庭の砂場には見事なトンネルや・川が出来ていて、このお山を壊さないという約束の旗が立てられていた。

明日は又、この園庭でどんな遊びが行われるのか楽しみ。暫らく砂場の作品に見とれていた。

思い切り、心身を使い、泥々になって遊ぶ姿、活動する表情は生き生きとしていた。健康、人間関係、言葉、環境、表現、砂遊びは五領域の総てを使う遊びであった。あんなに毎日泥だらけに遊んだ子ども達は、もう次の遊びに移っている。今、砂場にはあの時の熱気はない。子どもの遊びは生きているその時々が大切な時間である。



I-7 「みんなで食べる喜び」

附属幼稚園は創立以来三十年、お昼はお家のお母さん手作りのお弁当を頂いていた。

平成 19 年 5 月、卒園生が小学校でどのように生活しているか、毎年行われている幼・保・小の連絡会があり、旧担任が小学校に伺った。卒園生の話題の中で、園生活では何の問題もなかった A さんが、小学校の生活

の中で給食が食べられなくて、少々不登校気味の様子が伝えられた。旧担任は、いつもお弁当を残さず食べていた A さんの様子からは、想像出来ないことであった。直ぐお宅にどんな様子が連絡を取ってみて解った。お母さんの話によると、本人の好きな物を毎日お弁当に入れていたとのこと。

さて、給食が食べられなくて不登校になる小学生の話は、同年 6 月上田市教育委員会主催による幼・保・小・中学校の園長、校長会の折にも、小学校の校長先生が問題として出された。私はこの問題を大変重く考えた。それから先生方に話の中で、お弁当の内容、おかずについて聞いた所、冷凍食品が多い・電子レンジで調理（チン）する揚げ物が多い・おかずがいつも同じ子どもが多い・煮物などは少ない・色はきれいなお弁当とのことであった。私もお弁当を時々見ていたが、子ども達のお弁当はカラフルで、ラッピングされた可愛いおにぎり、食材を入れる紙の小さな入れ物に入ったおかず、食べやすい大きさに切られた食品など、お母さんの工夫と愛情がいっぱい感じられるお弁当であった。



豊かなお弁当 1



豊かなお弁当 2

私はその時は可愛らしいグラビアのページのようなお弁当に驚いてしまったが、前述のように見た目は美しいが、内容が決まっている、食材や調理方法は少ない、煮物の入っている茶色のお弁当は、極めて少ないことを知った。

長い歴史のあるお弁当であったが、思い切って週に 1 回給食を取り入れることの検討を始めた。

幼稚園では、クラスごとの畑があって、イチゴ・キュウリ・トマト・ナス・ピーマン・ジャガイモ・サツマイモ等、沢山の野菜や少々の果物も作る。土壌を作って下さるのは、バスの男先生、次は子どもと担任が苗を植える。みんなで水を運び植えた時、「大きくなーれ」と何回も声をかけて、水をかけてやる。その後も成長を観察したり、雨の少ない時は、みんなで水を運び水やりをする。収穫の時が来ると、クラスみんなで収穫し、或る時は生でお塩をかけて新鮮なキュウリを頂いたり。又スープやお味噌汁にしたり、カレーになったり、蒸かし芋にしてお塩で頂いたりする。どんな調理法でも、自分達が手塩にかけて育てた作物なのと、新鮮なことで味は抜群、野菜その物の味が美味しい。

子ども達は、その味の美味しさで沢山食べる。そして野菜のきれいな子ども達も、他のお友達から「このキュウリ美味しいよ。食べてみて。」と言われ一口食べると、本当に美味しく思い、食べられるようになる子どもが多い。子どもの食事は離乳食時代は野菜を煮て、ペースト状にした物から柔らかい固形物になるが、生野菜は最後の方で入って来る高度な食品になるので、子ども達にとって、どちらかと言うとまだ経験の浅い食物である。

家庭では工夫をして調理しても絶対に食べない子どもでも、大勢の子どもと一緒に、無理なく自然に食べられる雰囲気があったり、又人の様子を見て真似をしてみる事もある。そして食べられた報告を担当にすると、担任はそれぞれの子どもの手の甲に、花丸を描いてくれる。子ども達は、それが自信になり、職員室にも見せに来てくれるので、一緒に喜び合う。

人は誉められる事によって自信をつけ成長する。それは子ども達も大人も同じである。

さて、給食導入の話に戻る、週1回の給食を決め、健康面での食物アレルギーのチェックや、医師の診断書などを提出してもらい、アレルギーの子どもで食べられない食材の時は、別のメニューにして始めた。

開始されると驚いた。豊富な食材、調理方法の豊かさ、洋風、和風、中華味、

果物など、子ども達は大喜び。大勢で頂く相乗効果もあって、花丸の子ども達が増えた。又、お家の方と参観日の折に給食を頂く機会も設けて、大変喜ばれた。お母さん方は作られる食事を比較して、食材の多さ、美味しい調理法に感動。給食の日を増やして欲しい要望も出ている。食材の多さや調理法の豊富さは、お母さん方も、私共教職員も大変良い学びになった。



給 食



残念なお弁当 1

日々の食事の大切さ、日本文化の料理の伝統も核家族化が進む中で、母や姑から継承されていない。スーパーなどの豊富な食品や、直ぐ食べられる調理された食品も多くあり、不自由なく食物が口に入るので調理に時間をかけない、素材を生かした調理法を知らない若い親が多くなっているように思う。

地球の温暖化によって、世界で食糧が不足して来ている。食糧不足の芽は、日本でも表われて来ている。地球温暖化やこのニュースを聞いて危機を感じる。日本伝統の食物や、この国や日本人に合った食事を作る智慧は、年配の方々が知っている。これからの日本を担ってゆく子ども達に教えない。お母さん方にも、ぜひ生きる智慧（食）を学んで欲しいと強く思う。

最近幼稚園のお弁当についての話題がニュース等でも取り上げられる。。

- 親が好きな物しか入れない
- 唐揚げ・おにぎり
- おかずはなくチャーハンだけ
- “おやつ”のようなお弁当
- 全部冷凍食品を入れる

○演出に凝る…仕切りの色や容器

○野菜が少ない

○お弁当の内容は要求する子どものとおりにする。お弁当の内容は前夜子どもと相談して決める等もあった。

昭和 50 年代、幼稚園教育要領では、「食べ物の好き嫌いをしない」と言う項目があったが英才教育に片寄っているという批判から、平成元年の幼稚園教育要領の改訂で、自主性・主体性を重んじることに変わり、偏食を直すことは教育要領から消えた。その後、今日の子どもの姿の中に貧血や肥満、それによる体の病気が増えて来ている。食事は子どもの将来に関わることである。子どもに体の異常が起きている。保育の現場では、公に発表される以前から異常に気付き、対処をしている。現場は日々変化し進んでいる。昔からの事や伝統であっても時代によって変わって行く事に対しては、子どもの姿を見て臨機応変に対処する柔軟性が必要である。今回給食の導入をして強く感じたことであった。

全ての人の賛成は得られなくても、状況をしっかり見る賢い目と心を持って、本当に子ども達に必要なことを考えることが大切だと痛感している。

更に、子どものお弁当を見ていて気付いたことは、お母さんの心のこもった色々の食材の入ったお弁当の子どもは、比較的気持が安定しているように思った。それはお母さんの気持が子どもに向いていることで、子どもの気持が満たされている姿であると感じた。

I-8 「ウサギの飼育とこどもの心」

附属幼稚園では、創立の年よりニワトリを飼育し子ども達が世話をしていた。その後、ウサギが加わった。ニワトリは大きなウコッケイもいた。早く朝を知らせる鳥であった。幼稚園が出来た頃は、近くに建物は無かったが、その後数年して家が建つようになった。或る日、ニワトリの鳴き声が迷惑だと言うクレームが入り、ニワトリは裏山の林の中へ引越をした。子ども達は、そこまで行って世話をしていた。数日後鶏舎にニワトリの姿

は無かった。少しの毛が残り他は何もなかったという。裏山にはキツネやタヌキが棲んでいるので、きっと連れて行かれてしまったと、子ども達に話した。子ども達は大切に飼育していたので泣いて悲しかった。

自然の中で生きる厳しさを知った時であった。

ウサギの飼育では、子ウサギが次々と生れた。可愛い姿は皆に好かれ、塩田の各小学校や、園児の家庭にもらわれて行った。園バスの送迎の折に、そのウサギと共に園児を迎えに来て下さるご家族もあって、とても嬉しかった。しかし反対に死んで行くウサギもあった。

世話をしているクラスの子ども達は、ウサギが大好きなので、死んだウサギのお墓を作り、「天国にいったら、いっぱい食べてね」と沢山のクローバーを摘み、又、裏山の花を摘んではお墓に供えてあげていた。お墓の上は、まるで小さな花畑のようでしたと思いを伝えている担任もある。子ども達は、可愛かったウサギとお別れすることにより、命の大切さを知って、心からうさぎを“いとおしい”と思った様子が伝わる。このような経験は小さい時にして、早くから命の大切さを知ることが大事と思う。

或る時、年少すみれ組の子ども達とウサギ小舎に行くと、年長まつ組の男の子が、お掃除をしていた。その後でウサギの側にしゃがんで、N君はウサギの背中をなでてやっていた。N君の静かで優しい顔、ウサギも静かにして、気持よさそうに、なでてもらっていた。ウサギが目をつむってなでてもらう姿“素敵なお光景だ”ウサギの世話をすると言うことは、こうして可愛がることを知ること。

犬や猫の場合は声を出して表現してくれるから、気持が通じ合って可愛さも増して来る。しかしウサギの場合は声を出さない、育てる側がウサギの気持になって配慮して育てることが大切。(どうしてあげたら嬉しいか考えて育てる。声を出さないのを忘れていたら死んでしまう。)育てる側が一方的に見てあげることが必要だ。このような動物を子どもの成長と共に育てることが良いと言われている。

飼育では飼の確保、清潔な環境、外敵から守る、気候の変化への配慮などがある。その中で飼については、全面的にお家の皆さんが協力して下さっ

ている。畑のキャベツ・ダイコンの葉・家庭のお野菜を袋に入れて持って来てくれる子どもがいる。

さて、年少すみれ組がウサギ小舎の前で待っていたが、お掃除が終り初めて小舎の中に入れてもらった。大喜びで中に入った途端、一人の男の子K君が素早く、ウサギの片耳を持って振り廻して投げた。私は直ぐ「ウサギがびっくりすることはしないでね」と言って、K君の片耳をつまんで「ウサギさんは、びっくりしたり、痛かったと思うよ」と言って耳を引っぱった「僕は痛くないよ」と返す。再度ウサギの気持ちを話す「今度はしないでね」と話して終わった。

その時の年少組の子どもの中には、元気に小舎に入る子と、恐る恐る入る子といろいろな姿があったが、子ども達の中から可愛い、さわってみたいという強い憧れを感じた。K君のした事は乱暴だったが可愛がり方を知らないと感じた。まず動物に興味を持ち触れてみたい子がいたら、動物を観察し、動物はどんな事をしてもらったら嬉しいか。反対にいやな事はどんなことか。又、絶対にしてはいけないことを教えることが大切だと思う。それが命の教育の原点だと思う。その事を以後先生方に伝えている。

今、子ども達は屋内で遊ぶあそび、テレビゲーム等をする事が多くなっている。或る子ども(他園)A君(3才)は、2才の時からゲームをしていた。3才になったA君は「僕は絶対死なない。リセットすれば生き返る」と言い、生き物は全て死んでもリセットすれば生き返ると思っていた。その様なことのないように一回しかない命の大切さを、本気で教えていかなければならないと強く思う。

I-9 「或る日の年中組(初めての民主主義)」

或る日、年中組では、お食事をしたり、製作をするグループを決めることになった。

1組と2組は違った方法で決めていた。その様子について、とても興味深い姿があったので記してみたい。

1組は筒の中に4色の色紙が入っていて、それを引いて色分けグループを作った。

2組は、先生が4人のグループを作っておいて発表し、そこで各グループごとに果物の名前を付けることになった。グループ4人で名前を決める話し合いが始まった。4才児は個性の芽が出て来て自己主張が強い時、生れて初めての話し合い（そんなことを意識していない子ども達だが、教師4人はどんな会話があって決まって行くか、楽しみであった。）

正に集団と個の調整をどうするか——小さな小さな民主主義の世界が成立する、初めての経験。——

子ども達の一つのグループでは、「バナナ」と言う男の子。「みかん」と言う女の子。そのうち話は横道へ入って行く。R君がTさんの名札のマークを見て「りすは、どんぐりが好きだよね」そのうちR君は自分の名札のマークを見て「運動が好き」と言った。R君はクジラのマーク、クジラは運動が好きと伝えたかったと思う。…ゆっくり時間が過ぎた……そんな事をしているうちにTさんが「みかん」と言って、グループ名は「みかん」に決定した。

一緒に見学していた男性の先生は、始めは男の子が言い出して、皆で途中寄り道があるが、最後迄、本来の果物のグループ名を付けるという目的を忘れず「みかん」と言ったのは女の子。彼女は司会者。男性と女性の姿の基がここにある。男の子は寄り道をするとうれしくことが多い。女の子は忘れない。そんな風にまとめられた。生れて初めての話し合いは、男の子が意地をはって「バナナ」にこだわらず、自然にすなり「みかん」に決まった。とても新鮮で、ワクワクするような感動があった。そこに立ち合うことが出来て幸せであった。

I-10 これからの幼稚園のあり方について

幼稚園の中であって、日々子どもの姿を追っている中で、この研究をまとめた。その結果、今後の幼稚園のあり方について以下のように考えた。

1. 一つのことに凝り固まらず、柔軟に色々なことを取り入れる。
2. 子どもの変化に応じて変えていくことが大切。(保育者の力)
3. いろいろな考え方の人がいても良い。
4. 時には最新のものを取り入れる。
5. こうあるべきだと、リードしていく。
6. 本園の教育方針をしっかりと伝え、保育や子どもの姿を見て頂き、親御さんに納得してもらえば園児は集ってくる。
7. 社会の動きを常に把握し、子どもにとって大切なことを考えて行動する姿勢が大事。

おわりに

子ども特に年少組3才～年長6才で体験した想像の世界。夢を持つことは、五感を通して感性を刺激し育てる。

この活動は幼稚園教育要領の五領域の総てが含まれている活動であった。毎日の保育では保育者の感性や、人柄、経験が問われる。子どもの言葉や話の中で瞬時に方向付けを判断して、子どもと遊びを作って行く。充実した保育を行うことは常に保育者のスキルアップが大切だ。単に年数を重ね、経験があることに甘えていてはいけない。子どもの世界は常に動いている事を感じた。

教職員も一丸となって前向きに取り組む。保育者は毎日、子どもと共に労を惜しまず楽しそうに園舎で園外で子ども達と遊んでいる。日射の強い園庭で、子どもと汗をするその姿は、倉橋惣三の「育ての心(上)」(フレーベル館)“汗”にも書かれている、先生方の汗は本当に貴いと思う。その安心の中で、子ども達は生き生きと輝いている。先生方の生き生きした姿が子ども達を成長させ輝かせていると思う。

毎年5月、卒園生を送り出した担任は、幼保小連絡会で小学校に伺い、卒園生の小学校での様子を見学したり、お話を伺う。卒園生は、幼稚園の担任の先生が来てくれることを、心から楽しみにして待っていてくれる。

送り出した園として、卒園生が元気で、いい顔で迎えてくれたり、落着いて授業を受けていた等と報告を受けると、心から嬉しく先生方と共に喜び合う。そんな中で今年は或る小学校に伺った担任から嬉しい報告があった。

一つは、園が今迄行って来た感性を生かした教育（裏山の取り組み・空想の世界から夢を育てる）の結果のように思う。校長先生が「夢を持つ心を育てるのは幼児期です。この時に空想したり夢を育てる経験をしている子どもは幸せです。その後の年齢で、不思議や空想を育てる事は、少し無理のように思います。」と話されたと言う。

人の心も、色々の要素の育つ時期があつて、空想や不思議は幼児期の教育経験が基となる。今回、3才、4才、5才児、それぞれの空想の世界を見たが、年齢や成長によって変つて来ることを感じた。その意味で子ども達が「希望に膨らむ柔軟な心」を持ち「心豊かに」育ってくれる事を願わずにはいられない。宇宙飛行士、毛利さんが「科学には夢が大切です」と話されたのを聞いた。芸術・科学・生活・総ての面で夢や感性は、人生を豊かにしてくれるものである。

閉塞感の漂う現在の日本の中で、健康で夢のある豊かな心を持った、これからの子ども達を育てる事は、保育に携わる者にとって重要な課題であり、楽しい目標でもあると感じている。子ども達の様子を見ると本質は變つてないが環境によってその姿は急速に變つて来ている面がある。それを早く察知して現場で対応することが必要と感じている。

本園の教育面、環境面で今迄行って来た保育は今回の改訂に添っていると感じた。裏山を使った保育は、本園の大事な教育の要であると考えている。

幼稚園の教育には多くのことがあるが、その中で子ども達が一幼稚園に行っても自分の居場所がある—と思える園でありたい。

そして園生活の中で、子ども達が「本当に大切にされた」と感じられるような原体験を経験出来る幼稚園教育を目指したいと心から思う。